



学園花の村機関紙第98号

2017年8月3日(木)

編集兼発行人 伊藤公博

☎ 042-636-8290

Fax 042-636-8291

〒 192-0914

八王子市千代田

937-78

「戦場からの遺言書」

― 戦争を知らない世代へ ―

「学園花の村」事務局長 藤本 将

今年もまもなく72回目の終戦記念日を迎えるようとしています。日本は戦後このかた平和が永く続き安定した経済発展のおかげで、豊かになり平和を享受してきました。

しかし最近の朝鮮半島や日本海を取り巻く情勢は大変心配になってきました。北朝鮮の核・ミサイルの急速な開発は大きな脅威をもたらしております。また自国ファーストのトランプ政権の動き、中国の南シナ海での膨張政策など従来にもまして緊張感が高まっております。とりわけ「学園花の村」の指導者である津野幸人先生は現在の危機を本能的といってもいいぐらいに感じ取って我々に伝えておられます。現在、国内では自衛隊を軍隊として正当化しようという動きもあります。これまでは核戦争の危機に対し、よもや自滅することはしないだろうとの漠然とした期待感を持っているのでは

ないでしょうか。かつて軍部独裁の「神国日本」は孤立化しアメリカを相手に太平洋戦争を仕掛けました。結果は無残なものとなりました。よもやということが起きたのです。

今回起きれば地球は破滅します。人類も絶滅します。それは誰もが承知していることなのです。しかしこれまでも発端は偶発の事件から戦争が起きたことは歴史が証明しております。

一年ほど前に羽鳥宏さんの奥様から表記の本が送られてまいりました。

著者の羽鳥宏さん（ペンネーム新城宏）は私的な勉強会三水会（毎月第三水曜日に開催）のメンバーで当時お住まいが同じ方向であったために帰りの電車で一緒になることが有りました。その後湯河原に引越し晴耕雨読の生活を過ごされておりましたが、はからずも奥様からの本の到着が羽鳥さんの計報となりました。

この本を読み進むうちに副題にあるように子供達や知人にもどうしても読んでもらいたいとの気持ちにかられました。

昭和9年生まれの羽鳥さんはこの本の中でこう述べています。

「人生の最も多感な少年時代に戦争に積極的に協力して、敗戦によって戦争のメカニズムを一番よく知る世代として、あの忌まわしい狂気に満ちた歴史がくりかえされようとしている現状を黙視することができず、戦争を知らない世代に戦争のむごさと愚劣さをなんとしても伝え残さねばならぬという強い気持ちで書いている」。またこの本では中国共産党軍の捕虜となり9年間も抑留されたケースや「ビルマの堅琴」（竹山道雄）にも触れておられます。

奥様に在庫を確認しましたところ一冊しかないとのことでした。先日送っていただきました。参考文献も同封してありました。深謝。

本の表紙は反戦・平和を訴えた画家ピカソのゲルニカです。現在手元には2冊あります。回覧を希望される方はご連絡ください。お返しします。またお手持ちで、譲っていただける方はご一報お願いいたします。

連絡先 〒215-0011

川崎市麻生区百合ヶ丘3-3-19

藤本 将

☎ 044-955-5152

携帯 080-5088-8275

涼を呼ぶ黄色のキンシバイ

小 関 栄

我が家の庭にはキンシバイ(金糸梅)がたくさん咲いている。雑草の生茂る中に長く伸ばした枝先に真黄色な五弁の花が咲いていて、何となく涼しさを呼んでいる。

キンシバイはオトギリソウ属オトギリソウ科。その科の植物は約二千余あるが、キンシバイはその一種、名称は *Hypericum Patulum* (パツルム) が学名という。(園芸植物大事典より)



キンシバイは中国南西部が原産で、日本でも温暖地に自生するが、よく見ると殆んどが同種のオトギリソウの仲間で、真のキンシバイはごく少ない。二十二世紀の丘公園(通称たまりーな)にも沢山咲いていて皆はキンシバイと云っているが、キンシバイの特徴は、花弁が丸みを帯びた椀状、中にごく短い沢山の金糸のような雄蕊がある(上掲の写真のように)ので他と区分される。和名は漢名の金糸梅をそのまま音読みしたもの。花が黄色で連翹(れんぎょう)に似ているので中国では雲南連翹とか山黄花とも云っている。(7/10 写)

キンシバイ 一輪咲いて 涼を呼ぶ 淡水

はなの村だより第92号の粟本地区民への配布400枚に

はなのむら光陽の里の端に小さな城山公園があり、ここにイペの苗木が数十本植えてありイペの森とも云っている。この森は、昨年からの粟本地区(葛が丘、水垂、初馬の約2,000世帯)の街づくり協議会の整備地区となり、毎月末各地区から区民30余名が交代で草刈り・掃除作業を行っている。

昨年7月末に、このイペの木について書いた「はなのむらだより92号」を当時草刈りしている人達に配布したところ、大変に関心を持たれて、協議会の役員からも特に依頼があって、その「たより」(右の写真様に拡大)を毎回参加者に配布することとなって、今月末で丁度満一年になり、その間に配布した数は400枚となった。これによりイペの木が理解され、はなのむらの活動が知らない地区民にも広報することが出来ました(小関栄、記)

鮮やか真黄色なイペの花(城山公園のイペの森に) 小 関 栄

イペの木はイペーとかイッペエとも呼ばれる南米特産の落葉高木。五月中旬に、新緑の葉に先駆けて、ひとお鮮やかな真黄色の花を咲かせる。ノウゼンカズガク科で黄金ノウゼンとも云われている。

(右の写真は下の木の枝先部分の花)

花の村の光陽の里の西北端、水垂と初馬の境に城山公園があり、そこにイペの森がある。この森は地元(掛川市初馬)出身の平野運平さん(ブラジル移民の先駆者で、ブラジル開拓の父と云われている)の「彩会」を100周年を記念して五年ほど前にイペの木を数十本植えたので名付けられている。

イペの木は耐寒性が弱く、夏の水不足と相まって育ちが良くない。その後何度か補植しているが、昨年度から粟本地区民が街づくりの一環として公園の整備をする事になった。平成29年度は29/～29/8月(月末の日曜日、計8回)に草刈り作業をして公園整備しようとしている。やがて何年後にはこの木が成長して名前のようにイペの森なるだろう。この花はブラジルの国産。昨夏はブラジルのリオデジャネイロから親しい関係にある、日本とブラジルは若くは親しい関係にある。この森を愛し花を愛でて、ブラジルともますます近く親しくなることを祈っている。

(左の写真は、イペの森と同時に植えた掛川市生涯学習センターの平野運平副館長のイペの木を植えて五年で未だ小さい。28.5.31撮影)

さわやかに 黄金のフリル イペの花 淡水

2017 07 05

一学園花の村園地「花のむら」たより第92号より転載

幸せに過ごそう

我らのゴールデンタイム

里山倶楽部会長 溝口 博之



ツリーハウスで語らう里山倶楽部の面々

新幹線の早さに慣れつこになつて、リニアカーを走らせることになつた。固定電話が携帯になつてスマホになつて、より早くより便利になつた。でも、豊かな現代人は、どうもせいせいとした幸せの実感を持ってなくなつたようだ。忙しくてゆとりがなくなつたのだろう。男は八五歳くらいまでが元気で行動できる限界だと言われている。

る。子育ても終わり、現役時代のストレス、ゆとりのなさから解放されたリタイアマンのゴールデンタイムはまさにその間の十数年間なのだ。その大切な時間を病氣などで幸せ感を持って過ごすのはまったくもつたいない。世の為になる大きなことはそれなりの人に任せ、私は自分が健康で人生を楽しむことが家族や周りの人の幸せにつながるんじゃないかと思つている。私のゴールデンタイムは10年を切つた。ピザパーティー、コーヒーパーティー、生ビールパーティー、そしてキャンプ、ツリーハウスで幸せの時を過ごそう。

葛の蔓への対処 (寄稿)

楽農会新会員 長島 正樹

葛の蔓がよく伸びる季節になりましたが、刈つても次から次へと伸びてくる蔓を見ていると草刈りもいやになってきます。私は葛餅が大好きなので根を掘つてデンプンでも取ろうかと思ひ少し掘り進んだ

所、大変そうなので諦めました。冬になつたらまた挑戦したいと思ひます。掛川は葛布が有名との事、葛の繊維の取方を調べてみました。刈つても刈つても伸びてくる葛の蔓を草刈りという作業で終わらせない為に繊維でも取り出してみたいと思ひます。私は毎年ほんの少量、藍染めの原料となるタデ藍の葉を育てているので、収穫した葉から作つたすくもで、葛の葉から取つた繊維を染めてみたいものです。

お知らせあれこれ (藤本記)

● 全報連から助成を受ける

今年6月、私たち「学園はなの村」が加盟する全報連(全国報徳団体連絡協議会)から、布マルチ稲作の取り扱い拡大のため、10万円の助成を受けました。所期の目的達成のため活用を図りたいと考えております。

● 第4回報徳美合セミナー開催

7月29、30日、全報連主催により岡崎市美合町 愛知県青年の家に

て開催。今回は「学園はなの村」の名誉顧問の小関栄さんが講師となり、「二宮金次郎の人間性」というテーマで講演されます。

● 溝口おじさん個展のご案内

里山クラブ会長の溝口博之さんが個展を開きます。みぞぐちおじさん喜寿記念として今まで描きためた絵画展を開催します。おじさんの楽しい絵の世界をお楽しみください。

日時 7月29日(土)～8月5日(土) 9時～17時

場所 元氣一番ギャラリー

掛川市緑ヶ丘1-8-8

セイケンビル3階

問い合わせ/溝口博之

☎090-8336-6354

● 布マルチ稲作の披露

10月1日開催の協同組合ワークショップコープ主催、協同集会イン東海で、学園はなの村藤本事務局長が布マルチ稲作等の技法等を紹介予定

田舎暮らし——

「ばあばの学舎」たより

柴 桂子

ここ掛川市本郷に移住して5ヶ月が過ぎた。50坪ほどの畑からも収穫が始まった。京都の錦市場で昨年買っておいた黒エンドウを昨年11月に蒔いておいたところ、5月には実がよく実り、エンドウご飯にしたところ青エンドウより堅めでとてもおいしかった。わざわざ種用の豆を買わなくとも食用の豆で充分であった。そこでやはり京都で食用のために買っていた白いんげん、ウズラ豆、虎豆、小豆などを5月にあちこちに蒔いたところ芽を出しつるが延びてきた。どの豆のつるかわからなくなったが収穫が楽しみである。

赤、黄色のプチトマトや中玉トマト、サニーレタス、早生の枝豆は一人では食べきれないほど実り出した。青紫蘇、夏ねぎ、セロリも毎日の食卓に色を添えている。キュウリと茄子はまだ収穫できないが、近所の方がビワと一緒に届

けてくださる。量が多い時は、さらに隣家へおすそ分けしている。作物は今の所、無肥料無農薬である。太陽と風と気温任せである。

柚子、ミカン、ネーブルなどのかんきつ類は青い実が日ごとに大きくなっていくがかわゆく日に何度も眺めている。

庭や畑のあちこちには紫陽花、百日草、コスモス、百合、タチアオイ、桔梗と色とりどりの花盛りである。

庭の造作が進み、四ツ目垣に屋根つきの木製の門や竹網の扉に加え、紅葉や椿、姫しやら、そして念願の北山台杉に庭石を配置し、道しるべの灯籠や東京から運んだ小さな地蔵2体も庭を飾っている。

町会の皆で行う原谷川の土手の草刈りや原谷川へ注ぐ農業用水の溝浚いなどに、私など何の役にも立たないが、皆さんの名前を覚えるために参加している。「ばあばの学舎」はまだ内装が完成していないので開店はしていないが、近所

の方や掛川市内からいろいろの方々が見学に来られる。

先日、100歳の相羽さんがご手製の大きなひょうたんを持って、娘さんご夫妻と来てくださった。相羽さんご手製の大きな自在鍵はすでに「ばあばの学舎」に飾ってあり、場所を一段と和ませている。

(筆者は前「倉馬の里」長)

布マルチ稲作

実施状況

初馬地区

水管理が容易な初馬地区では5月22日 里山倶楽部が7畝歩に布マルチ敷設した。

水垂地区

当初1反歩を予定していたが松井道夫さんが病気のため、急遽代替で藤本がやるようになり、6月20日野田さん、池守さん、細谷さんの支援を得て敷設した。

面積7畝。パンダクラブの戸塚夫妻にも応援していただいた。

しかし翌日、豪雨が水垂地区を襲い、布マルチが流された。

丸三産業から布マルチを取り寄せ、6月30日修復作業をした。

今後の反省

事前の準備状況・実施時期・指針に沿った展開がなされたかどうか等、今後詳細な検討が必要と考えている。

食の安全

食を求める消費者のニーズに対応、「学園はなの村」のメイン施策として「布マルチ稲作」に力を入れていきたい。(藤本記)

「はなの村だより」の今後の

発行について

現在2ヶ月に1回偶数月発行、年6回の発行となっておりますが、事務的、経済的負担の軽減を考慮、今後3ヵ月に1回、年4回の発行に変更することを検討しております。発行月は2、5、8、11の各月です。